

ドイツの大学における日本語教育・学習はどの程度インターアクション志向か — 教師・機関・学習者を対象としたアンケート調査から —¹

(Interaktionsorientiertheit von Japanischunterricht und studentischen Lernmethoden an deutschen Hochschulen anhand von Ergebnissen einer Umfrage unter Lehrern und Studierenden)

高橋 淑郎 Takahashi, Yoshio (ミュンヘン大学日本センター Japan-Zentrum, Ludwig-Maximilians-Universität München)

要旨 / Zusammenfassung

本稿では、ドイツの大学で日本語を教える JaH 会員、所属する大学、および、ミュンヘン大学で日本語を学ぶ学生を対象として行った 3 つのアンケート調査の結果の中から、インターアクションに関わる側面を報告し、若干の考察を加える。

ここに言う「インターアクション」とは、現実の社会の中で、複数の参加者によって、ある目的を達成するために行われるひとまとまりの活動のことを指す。そして、教育や学習にそうした活動が組み込まれていたり、あるいはそうした活動を学習の目的としている場合、「インターアクション志向」であると見なす。

結論として以下のことが明らかになった。(1) 日本学のコース・授業はインターアクション志向のものが多くに対して、日本学以外のコースにおけるインターアクション志向は、割合として、ごく限定的である、(2) 学生が日本語を学ぶ目的はある程度インターアクション志向であるが、実際の学習環境はそれほど十分にインターアクション志向とは言えない。

Diese Fallstudie untersucht die Interaktionsorientiertheit des Japanischunterrichtes und der studentischen Lernmethoden an deutschen Hochschulen anhand einer dreiteiligen Umfrage. Zielgruppen waren Sprachlektoren aus dem Verein JaH sowie die Studierendenschaft am

1 本稿は、第 19 回ドイツ語圏大学日本語教育研究会シンポジウム (2013 年 3 月 1 日～3 日、ミュンヘン大学) にて筆者が行った口頭発表「各機関・各日本語講師およびミュンヘン大学学生へのアンケート調査」(3 月 1 日) を加筆・修正したものである。調査にご協力いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。また、調査の計画段階で村田裕美子氏 (ミュンヘン大学日本センター) から貴重なフィードバックをいただき、口頭発表後の質疑応答では複数の参加者から有益なご意見をいただいた。さらに、投稿原稿については本誌編集委員会から重要なコメントをいただいた。ここに記して、感謝申し上げます。

Japan-Zentrum der Universität München; Befragt wurde die Interaktionsorientiertheit von Lehr- bzw. Lernmethoden und des jeweiligen Curriculums.

Unter *Interaktion* wird die Gesamtheit einer Zusammenarbeit, mittels derer mehrere Beteiligte ihr Ziel oder ihre Ziele in Situationen des wirklichen Lebens umsetzen, verstanden. Ein bestimmter Unterricht oder eine bestimmte Lernumgebung gelten also dann als *interaktionsorientiert*, wenn sie eine *Interaktion* beinhalten oder auf eine *Interaktion* vorbereiten.

Als Ergebnis unserer Untersuchung zeigt sich, dass die meisten Japanischkurse für Japanologen in quantitativem Sinne stark interaktionsorientiert sind, während die Interaktionsorientiertheit in Japanischkursen für Nicht-Japanologen vergleichsweise beschränkt ist. Obwohl einer der Hauptzwecke des Japanischlernens für die meisten Studierenden die dynamische Benutzung der japanischen Sprache in Situationen des wirklichen Lebens ist, ist die tatsächliche Lernumgebung im Allgemeinen nicht ausreichend interaktionsorientiert.

1 はじめに

1.1 調査の概要と本稿の課題

ドイツ語圏の大学における日本語教育・学習の現状を概観することを目的として、ドイツ語圏大学日本語教育研究会 (以下 JaH と略記) 会員の日本語教師、JaH 会員の所属している教育機関、および、ミュンヘン大学で日本語を学ぶ学生を対象として 2012 年 11 月～2013 年 1 月にそれぞれの対象別に合計 3 種類のアンケート調査を行った (表 1)。紙面の都合上、調査結果のすべてをここで紹介することはできないので、本稿では、その中から、2013 年の JaH シンポジウムのテーマ「インターアクションからみた授業実践とカリキュラム開発」に関連する部分に焦点を当てて報告し、若干の考察を加える。

この調査を計画した第一の理由は、筆者自身を含めた当地の高等教育機関の日本語教育関係者が、自らの置かれた状況をより深く精確に理解するための素材を提供したいと考えたからである。第二の理由は、こうした実態調査によって得られる情報が、「ドイツ語圏」以外、あるいは、「大学」以外における日本語教育関係者がドイツ語圏の大学における日本語教育事情を理解するのにも有用だと考えたからである。特に、第 19 回 JaH シンポジウム (2013 年) の会場校担当者として、招聘講師に当地の日本語教育事情を知ってもらうための材料としても役に立つのではないかと考えた。

さて、本稿では、前述のとおり、この調査結果の中から、2013年のJaHシンポジウムのテーマに関連するものに焦点を当てる。具体的には、①カリキュラムはどの程度インターアクション志向か、②授業はどの程度インターアクション志向か、③学習はどの程度インターアクション志向か、について考察する。

なお、当初は、オーストリア・スイスを含むドイツ語圏全体の大学についての調査を計画していたが、実際に回答を得ることができたのがドイツの大学に籍を置く日本語教師、および、ミュンヘン大学の学生からだけだったので、以下、本稿では地域をドイツに限定して論を進める。

表1 調査の概要

	教師調査	機関調査*	学生調査
質問項目	日本語教育歴 日本人とのインターアクション 日本語でのインターアクション 学習項目の提示・練習に際しての留意点 その他、授業で心がけていること	コースの種類 到達レベル 使用教材 課外活動	日本語学習に際して利用しているリソース 授業以外での日本語との接点 日本語学習の目標
調査対象	JaH会員のうち、調査時点でドイツ語圏大学で日本語授業を担当している会員 合計52名	JaH会員が所属している機関 合計34機関	2012/2013年冬学期に、ミュンヘン大学で日本語授業に登録している学生 合計231名
調査方法	電子メールによる調査票の送付・回収		授業での調査票の配布・回収
調査時期	2012年11月下旬～2013年1月上旬		2012年12月上旬
回答数 (回収率)	23名** (44.2%)	23機関** (67.8%)	105名 (45.5%)

* 同じ大学であっても、異なる学科・センター等で各自の日本語教育コースが実施されている場合、それぞれを独立した「機関」とみなして集計した。また、複数大学間で共同運営されている言語教育センターも一つの「機関」と数えた。

** 教師調査の回答者数と機関調査の回答数はどちらも23であるが、実際には、同じ機関に所属している複数の教師がいた一方で、1人の教師が複数の機関で教えているケースもあったので、教師数と機関数が1対1で対応しているわけではない。なお、前者のケースでは、複数の教師の中の1人に代表して機関調査に回答してもらった。

1.2 「インターアクション」「インターアクション志向」の定義

「インターアクション」を重視し、「インターアクション教育」を日本語教育の中心にすえることを明確に主張したのはネウストプニー [1995] である。ネウストプニーは、いわゆる「コ

コミュニケーション」に関わる過程を、「言語行動」「コミュニケーション行動」「インターアクション」という3つに分けて把握することを提案した。「言語行動」とはセンテンスを生成する過程、「コミュニケーション行動」とは、センテンスを何らかの目標達成のために用いる過程、「インターアクション」とは、コミュニケーションを、社会文化的な目標達成のために行う過程だとしている[ネウストプニー1995: 67-69]。

ネウストプニーのこの枠組みは、一般的にコミュニケーションと呼ばれているプロセスを、一方は現実の社会と、他方は語学授業との関わりの中で位置づけるための明確な観点を提供していると言える。そこで、「インターアクション」に注目し、それが言語教育・学習の中にどのように組み込まれているか、あるいは、想定されているかを検討することによって、その言語教育・学習が、現実の社会における言語使用とどのように関わろうとしているかを把握することができると考えられる。このような発想に基づき、本稿では、「インターアクション」に着目してドイツの大学の日本語教育・学習の実態調査の報告を行う。

さて、上述のネウストプニーの枠組みを踏まえて、本稿では「インターアクション」を「現実の社会の中の具体的な場面において、特定の目的を達成するために、複数の人間が関わりあって行う活動」と定義する³。一方、「コミュニケーション」は、「インターアクションを構成する一要素として、複数の人間の間で言語を用いる過程」のことを指すことにする。たとえば、「学会シンポジウム初日の晩に行われる懇親会」は一つのインターアクションの例である。その目的としては、参加者間の親睦を深めること、情報交換、参加者の歓待、就職活動等が想定される。このインターアクションは、さらに、「日時・内容・担当者等の計画、決定」「予算獲得」「来賓への打診」「会場・ケータリング等の予約」「参加者への告知、申し込み受付」「会費徴収」「会場設営、片付け」「あいさつ」「自己紹介」「社交の、あるいは、実質的な目的をもった会話」「隠し芸の披露とそれに対する反応」「料理や飲み物をとる」「食べ

2 ネウストプニー [1995] の言う「社会文化行動」とは、「たとえば、日常生活の行動、経済、政治、思想行動など」[同: 42] などのことを指している。

3 これは、ネウストプニー [1995] の「インターアクション」という概念を筆者なりに解釈した上で、筆者のこぼで定義したものであり、ネウストプニー [同] の意図している「インターアクション」とは異なっている可能性がある。以下の「コミュニケーション」の定義についても同様である。また、後述の「学会の懇親会」を例とした説明も筆者によるものであり、ネウストプニー [同] に挙げられているものではないということを明記しておく。

たり飲んだりする」等々のさまざまな活動・過程に細分可能であり、その中で、複数の人間の間で言語を用いる過程（「あいさつ」「会話」など）が「コミュニケーション」と呼ばれるということになる。

また、本稿で言う「インターアクション志向」は、次のようなことを意味する。まず、カリキュラム・授業について言えば、その一部にインターアクションが含まれていたり、想定されていたりする場合、そのカリキュラム・授業は「インターアクション志向」であると判断する。学習について言えば、インターアクションを通して学習している場合、あるいは、インターアクションを直接的な目的として学習を行っている場合、「インターアクション志向」の学習をしていると判断する。

なお、授業それ自体も、教師と学習者によって行われる一つのインターアクションであるの言うまでもないことであるが、本稿では主として、教室内の活動が、現実社会における言語使用とどの程度関わっているかということを検討するので、インターアクション志向について言う場合の「インターアクション」は、基本的に「教室外のインターアクション」のことを指すことにする。ただし、教室内における日本語を用いた指示・説明や、授業内や授業前後の日本語による学生と教師との間の雑談・相談等は、現実的な言語使用、すなわち、インターアクションであると判断する^{4,5}。

1.3 先行研究

ドイツ・ドイツ語圏の大学の日本語教育・学習事情を概観した報告・論考として有益な先行研究はいくつかある⁶が、特にイ

-
- 4 ネウストプニー [1995] は、教育過程の中に直接導入された、本当の使用場面を「実際使用のアクティビティー」と呼び、8種類の活動を紹介している [同: 22-30]。その中には、よく知られているビジュアルセッションやイメージジョン・プログラムのほか、「本を開けてください」「スミスさん、すみません、ドアを閉めてくれませんか」等の指示を日本語で行う「教室指示」も含まれている。これら8種類の「実際使用のアクティビティー」はいずれも、本稿で言う「授業に組み込まれたインターアクション」に該当すると考えられる。
 - 5 一般的に言って、教室で行われるロールプレイ練習は、あくまでも教師によって場面や設定が与えられているため、本稿で言うインターアクションには該当しないと考える。ただし、それが他の具体的なインターアクションに向けた準備として行われているのであれば、その授業自体がインターアクション志向であると言うことはできる。
 - 6 ドイツを含む世界各国・地域の日本語教育事情の調査・情報としては、国際交流基金による「海外日本語教育機関調査」(最新の結果は [国際交流基金 2013ab])、および、「日本語教育国・地域別情報」([国際交流基金 2014]) がよく知られている。これらの中の該当

ンターアクションに着目したものは、管見の限りでは、ないようである。

一方、授業やカリキュラム等についての具体的な調査や実態報告としては、大学やコースごとの実践報告・研究や機関報告がいくつか発表されており⁷、その中にはインターアクションを直接扱っているものもある ([杉原 2011]、[濱田・小山 2011] など)。

本稿では、こうした個別の大学・コースごとの研究・報告も参照しながら、「インターアクション志向」という、従来の調査では扱われてこなかった観点から、ドイツの大学における日本語教育・学習の一般的実態を描き出すことを試みる。

1.4 本調査の現状反映度について

具体的な調査結果を紹介する前に、本調査のサンプル数が、事象の全体をどの程度反映しているとも言えるかについても触れたい。本調査が明らかにしたいのは、2012 年末～2013 年初頭の時点において日本語教育を実施しているドイツの高等教育機関、そこで教えている日本語教師、およびそこで学んでいる学習者の実態である。それぞれについての正確な数値は残念ながら不明だが、大規模かつ網羅的に行われている国際交流基金の 2012 年度調査 (以下、「基金調査」と略記) の結果⁸と比べると、表 2 のようになる。

箇所を通覧することによって、ドイツの日本語教育事情についても基本的な情報を得ることができる。また、最近のドイツの大学における日本語教育事情を概観した論考として、ウンケル [2006] は、ドイツの大学における日本語教育の歴史を紹介した後、00 年代半ばの時点での大学レベルの日本語教育機関、日本語教員の資格・地位、教材、CEFR や新学位制度 (BA・MA) の影響などについて詳しく報告している。飯島 [2011] は、大学における日本語教育プログラムの種別をより詳しく紹介し、日本語教育の行われている大学数や学習者数についても独自の推計を行っている。

7 ドイツ語圏の大学の場合、JaH 紀要 „Japanisch als Fremdsprache“ のほかに、『日本語教育連絡会議論文集』(renrakuikaigi.kenkenpa.net/2014 年 9 月 25 日アクセス) 等にも実践・研究報告や機関報告が掲載されている。

8 国際交流基金 [2013a] 付属 CD-ROM の「表 1-1b 日本語教育機関数・教師数・学習者数 (地域順/複数段階教育有)」記載のドイツの高等教育機関における集計結果。

表2 本調査と基金調査のサンプル数の比較

	本調査の サンプル数 (A)	基金調査の サンプル数 (B)	カバー率 (A/B の %)
機関数	23	46	50%
教師数	23	169	13.6%
学習者数	105	6085	1.7%

機関数は基金調査の半数をカバーできていると言えるが、教師数は約 14%に過ぎず、学習者数に至っては 2%もカバーできていない⁹。さらに、大学や州ごとの事情の違いも大きいと予想されることから、今回の調査結果は、特に教師・学習者に関しては、残念ながら一般化するのは難しいと言わざるを得ない。

2 結果と考察

2.1 カリキュラム

ドイツの大学における日本語教育コースは、大きくは、日本の学生向けに行われるもの¹⁰ (以下「日本学」と略記) と、それ以外の学生向けに行われるもの¹¹ (以下「日本学以外」と略記) とに分けられる。

本調査で回答が得られたコースの数は以下のとおりである (表 3)。機関数 (表 2) とコース数が一致しないのは、一つの機関が複数のコース (たとえば全学学生向けコースと集中講座など) を実施・運営する場合があるからである。

-
- 9 飯島 [2011:47] は、日本語教育が実施されているドイツの大学数は「およそ 100 校前後と推測される」とし、学習者数は「正確なところは不明である」としつつも「総計 9 千人から 1 万人程度」と推計している。この数値を採れば、本調査の現状反映度はさらに低くなることになる。
- 10 研究やビジネスで実用できるレベルの総合的な日本語能力の育成を目指して、BA 課程では通常、週 6~10 時間程度の授業が 2 年間程度、その後、週 2~4 時間程度の授業がさらに 1~2 年間行われる。現代語だけでなく、文語や漢文読解の学習がカリキュラムに組み込まれている場合も少なくない。
- 11 日本学以外のコースで最も多いのは、いわゆる「全学学生向け日本語コース」で、通常は週に 2~4 時間程度の授業が、2~4 学期間程度行われるものである。このほか、飯島 [2011: 46] はさらに、歴史・経済研究などの中の日本研究部門においてある程度の時間を割いて行われるコースもあることを紹介しており、本稿ではこれも「日本学以外向けコース」に分類する。また、大学が実施している集中講座もこのカテゴリーに含む。

表3 コース数(全体の数とインターアクションを組み込んだ数)

コース種別	コース全体の数	インターアクションを組み込んだコースの数 (全体に対する%)
日本学	8	5 (63%)
日本学以外	17	3 (18%)
合計	25	8 (32%)

さて、これらのコースのカリキュラムはどの程度インターアクション志向だと言えるだろうか。この点を考察するために、コース別のアンケート調査で「授業以外の活動(タンDEM、プロジェクトワーク、日本人家庭訪問、日本留学など)がカリキュラムに組み込まれている場合、活動内容と該当学期等をお書きください。」という質問を行った。結果は表4のとおりである。

まず、日本学では7件の活動が報告されているが、同じコースで複数の活動を実施している場合もあるので¹²、実際には5つのコースで、いずれもインターアクションと呼べる教室外活動がカリキュラムに組み込まれていることになる。したがって、日本学のコースの半分以上はインターアクション志向だと言えることができる¹³。

一方、日本学以外では9件の活動が報告されているが、日本学の場合と同様に、同じコースで複数の活動を実施している場合があるので¹⁴、実際には5つのコースで課外活動が行われている。ただし、そのうちの「日本から大学生などの訪問があった場合は積極的に授業に招待している」「日本人訪問者アテンド」は、偶然に左右される活動だと思われるので、カリキュラムに組み込まれているとは言いがたい。また、「交換留学 Info」は日本語が介在していない可能性が高く、「映画鑑賞会」も、おそらくはドイツ語(あるいは英語)の字幕による鑑賞とドイツ語での導入や意見交換などを含むと予想され、いずれも日本語によるインターアクションとは言いにくいように思われる。表4中の⑦文化学習

12 「留学に向けた準備」と「ビジターセッション」、「スカイプタンDEM、集中タンDEMコース」と「日本人家庭訪問」はそれぞれ同じ一つのコース内の活動である。

13 さらに、本調査の回答には含まれていないが、ハンブルク大学日本学科のコースも日本留学が必修となっており、その準備としての日本人学校訪問の活動も行われている [杉原 2011]。また、ボン大学日本学科では CEFR に準拠したシラバスと試験が実施されており [奥村 2010]、そこでも具体的なインターアクションが組み込まれているか想定されている可能性が高い。

14 「日本人留学生との交流促進」と「グループワーク(日本旅行計画)」、「日本人訪問者アテンド」と「プレゼンテーション」、「日本人留学生との交流促進」と「交換留学 Info」と「新年会」と「映画鑑賞会」、はそれぞれ同じ一つのコース内の活動である。

「Portfolio に Culture Study Record と Culture Study Report を入れるのが必須」に関しても、「Culture Study」の内実はさまざまなものがあると予想され、一概に日本語によるインターアクションであるとは言い切れない。以上、恒常的とは言えない2件の活動と、保留が必要な3件の活動(表4の△印を付したもの)の合計5件を除くと、残りの4件の活動を行っているコースが3つとなる。したがって、日本学以外の中では、この3つのコースがインターアクション志向だと言えるということになる。

表4 授業以外の活動一覧

活動のタイプ	日本学	日本学以外
① 留学	○*日本留学が必修* ○留学に向けた準備	
② 実習	○Praktikum をすることが義務付けられている(交流協定校への留学をはじめ、日本語コース参加(国は問わない)、ギムナジウムでの日本語AG ¹⁵ の手伝い、ワーキングホリデー、インターンシップなど)	
③ タンデム ¹⁶	○スカイプタンデム、集中タンデムコース	
④ 在独・訪独 日本人との交流	○ビジターセッション ○日本人家庭訪問	○日本から大学生などの訪問があった場合は積極的に授業に招待している。 ○日本人留学生との交流促進【2】 ○日本人訪問者アテンド
⑤ その他の活動	○演劇活動	○プレゼンテーション ○グループワーク「日本旅行計画」
⑥ イベント		△ 交換留学 Info(国際課と共催) ○ 新年会 △ 映画鑑賞会【2】
⑦ 文化学習		△ Portfolio に Culture Study Record と Culture Study Report を入れるのが単位取得のための必須条件となっている。

○ インターアクションと言えそうなもの、△: インターアクションと言えるかどうかについて保留が必要だと考えられるもの。

□ 内は件数。数字が示されていない場合は1件。

15 AG (Arbeitsgruppe) とは、ここでは「勉強会」のことを指す。

16 タンデム (Tandem) とは、お互いの言語を学び・教え合う交換授業のことである。

以上をまとめると、カリキュラムのインターアクション志向性に関しては日本学と日本学以外では大きな違いが見られ、前者はインターアクションをカリキュラムに組み込んでいる機関の割合が大きく、後者では小さいということが言える。この違いは、要求される到達レベル、授業に投入される時間数と教員数や予算の違いを反映したものと考えられる。とは言え、具体的な活動(表4)を見ると、日本学以外のコース担当者が、限られた機会や可能性を活用して、日本語授業で学ぶ学生たちを日本社会・文化や日本語・日本人と積極的に接触・交流させようとしていることもうかがうことができる。

2.2 授業

次に、授業がどの程度インターアクション志向であるのかを検討する。教師に対するアンケート調査で、担当しているコースのうちから授業を一つ選んでもらい、その授業のタイプや概要についての情報を提供してもらった上で、次の質問に自由記述式で答えてもらった(枠内の文章は調査票からの引用)。

学習項目の提示・練習に際しての留意点

その授業の中で、学習項目の提示・練習に際して特に心がけていることがありますか。

【記入例】

- ・必ず翻訳させて、きちんと理解しているか確認するようにしている。
- ・できるだけ豊富な用例を出すようにしている。

22名から26の授業に関して回答を得た¹⁷が、まず、回答を分析する前提として、選択された授業の学期・授業タイトルを表5に示す。学期に関しては、「1・3学期」「1・2学期」等複数の学期が併記されていた場合、番号の若い学期のみカウントした(この2例ではいずれも「1学期」でカウントした)。また、授業タイトル欄の()内は該当する授業が何学期目に行われているかの情報である。

日本学以外では「1学期」、すなわち、ゼロ初級向け授業についての回答が中心となっているが、日本学では「1学期」と「3学期」の授業がほぼ同率である。授業タイトルは、「指定なし」、つまり、いわゆる通常授業が日本学で半分弱、日本学以外では7割強を占めている。

17 実際には27の授業について回答があったが、担当授業についての回答がありながら、「学習項目の提示・練習に際しての留意点」についての回答が空白だったものが1件あったので、それを除外してここでは26の授業についての回答結果を示す。

表5 選択された授業の学期・授業タイトル (n=26)

日本学 (n=15)				日本学以外 (n=11)			
学期*	数	授業タイトル*	数	学期*	数	授業タイトル*	数
1 学期	6	指定なし	7	1 学期	5	指定なし	8
3 学期	7	文法・会話 (3)	1	3 学期	3	会話 (1)	1
5 学期	2	会話 (3)	1	7 学期	1	読解・会話 (3)	1
		読解 (3)	1	その他	2	ILPT 準備 (7)	1
		文法・読解 (1)	1				
		翻訳 (1・3)	2				
		漢字 (1・2)	1				
		メディア (5)	1				

* 「学期」は、回答者が選択した授業を、配分されている学期別に集計した数値で、「授業タイトル」は、タイトル別に集計した数値である。

さて、この質問では、教師が授業の中で留意している点を知ることによって、どのように授業が行われているのかを探ることを意図している。26 の回答が得られたのだが、ほとんどの回答が複文・文章で構成されていたため、回答を、単文相当の単位 (以下、「コメント」と呼ぶ) に分割し、全部で72 のコメントを得た。

各コメントは、筆者の判断で、そこで注目されている観点ごとに「教室活動」「媒介語」「宿題」等のカテゴリーにラベル付けして整理・集計した。1 コメント中に複数の観点が含まれていることもあり、その場合は、それぞれ別に集計した。たとえば、日本学向けコースの3 学期目の授業を担当する回答者による「自分発の、具体的なコンテキストの伴った作文や活動練習。」というコメントには「1. 多様な (教室) 活動 (「作文や活動練習」)」「2. 場面・文脈・用例 (「具体的なコンテキストの伴った」)」「3. 話題 (「自分発の」) (番号は集計の都合上のもので、特別な意味はない) という3 つの観点が含まれているものと判断し、それぞれの観点ごとに度数をカウントしてある。

表6 は、その観点について言及のあったコメント数が4 以上のものを一覧にしたものである。ここでとりあげた14 の観点は、大きく「インターアクション」「理解」「学習」の3 領域にそれぞれ関わるものとしてまとめることができる。

まず第一の領域では、「1. 多様な (教室) 活動」は、ペア・グループワークのほか、発表、作文活動などを含む。「2. 場面・文脈・用例」は「用例や用法の文脈を十分提示する」「できるだけ現実にありそうなやりとりになるように問題をアレンジ」「具体的なコンテキストの中で文法、語彙を導入」などのコメントに対応している。「3. 話題」は「なるべく個人にかかわる会話ができるように心がけている」「出来るだけ日常的なところからテーマを拾い、テキストのテーマに関連付けていく」等、個人や身近な生活を素材にした話題を用いるというコメントに

対するカテゴリーである。「4. 聞き取り練習」は、単なる聴解練習ということではなく、「常体の会話に慣れる」「指示を日本語で出す」のように、教室や生活の中でインターアクションするために必要な日本語の聞き取り能力の練習をさせるということである。「5. 媒介語 (日本語)」は、「指示を日本語で出す」「逐一独訳しない・させない」「翻訳せずに内容を把握する」など媒介語を使わないというコメントを含む。「6. 生教材・日本人」は「いろいろな日本人の話を聞いたり、日本人と会話する (ゲストスピーカー)」「生教材 (ネット、ビクターなどを含む) の重視」「教科書の読解文にそった生教材を探して、それを学習者と一緒に把握する。」等である。以上の観点は、日本語によるインターアクションそのもの、あるいは、その練習・準備、あるいは、インターアクションが成立する場面や文脈の提示であり、「インターアクション志向」の授業が行われていることがうかがえる。

表6 学習項目の提示・練習に際しての留意点(度数4以上)

観点		コメント数* (n=72)	回答者数: 全体 (n=21)	回答者数: 日本学 (n=12)	回答者数: 日本学以外 (n=9)
インターアクション	1. 多様な(教室)活動	15	8	6	2
	2. 場面・文脈・用例	12	7	5	2
	3. 話題	10	8	6	2
	4. 聞き取り練習	9	6	4	2
	5. 媒介語(日本語)	5	5	2	3
	6. 生教材・日本人	4	3	2	1
理解	7. 理解確認	7	4	3	1
	8. メディア使用	7	4	3	1
	9. 媒介語(ドイツ語)	5	4	3	1
学習	10. 復習・宿題	6	6	3	3
	11. 理解ストラテジー	6	4	2	2
	12. 構文・文型	4	4	3	1
	13. 気づきの促進	4	4	3	1
	14. 学習目標の明示	4	3	2	1

* 「コメント数」はコメント単位の集計結果で、同一の回答者が異なる授業で同じ観点到に言及している場合は、そのたびにカウントされている。「回答者数」は回答者を単位とした集計結果で、同一の回答者が複数の授業で同じ観点到に言及していても全体として1回としかカウントされていない。

第二の領域は、正確な理解、あるいは、理解の定着に関わる観点である。「7. 理解確認」は読解・翻訳授業でのもものがほとんどである（「テキストの内容がとれているか確認するために要約させる」「読解では、テキスト全部を翻訳させる場合も、内容理解をチェックするだけの場合もある。両方、必要だと考えている」）。「8. メディア使用」は「語学教材の CD 以外にも音楽など音声教材をつかい聞き取り練習」「関連するビデオや DVD などがある場合はなるべく見せるようにしている」など、学習内容を楽しく、あるいはより深く理解させるためのメディア利用である。「9. 媒介語（ドイツ語）」は「教科書のテキストはきちんと理解させて翻訳させる」に代表されるコメントで、日本学では読解・翻訳の授業の担当者から、日本学以外では JLPT 対策授業の担当者からのものである。

第三の領域は、学習方法、ストラテジーの習得、自律学習支援などに関わる観点である。「11. 理解ストラテジー」は「なるべく翻訳をせずにコツを把握して、それについて話し合う。」「追加のテキストを読みながら、だいたい分かるようにストラテジーを伸ばせるようにしている」等、読解・翻訳授業や漢字授業に対応したコメントである。「12. 構文・文型」は「文法・文型を自分で考えながら習得させ、自律学習の基礎を作る」「文法では、文構造を意識させ、その中で各部分の文法を正しく使えるように指導している」など、文型や文構造に注目した指導・学習の重要性を指摘したコメントを含む。「13. 気づきの促進」は「説明は後で、まずは考えさせる」「文型や語彙を丸暗記するのではなく、ニュアンスの違いなどを自分の言葉（ドイツ語）で考えながら学習させる。」「基本的な文法の誤りに気づき、訂正できるようにする」等である。

さて、「学習項目の提示・練習」に際して、日本語の授業はどの程度インターアクション志向だと言えるだろうか。まず、全体的に「インターアクション」に関わるコメントが多く見られることが分かるが、コース別に見ると、日本学の担当者ではその傾向がかなり強い一方で、日本学以外ではそれほどでもないということが分かる。これは、前節でも見たとおり、インターアクション志向のカリキュラムを持つコースが多いということ、および、その背景としての時間数・教員数・予算等の違いに対応した傾向だと考えられる。

さらに、日本学の担当者の回答が「インターアクション」に関わる領域に比較的集中しているのに対し、日本学以外の回答は浅く広く分布しているということも言える。その中でも回答者数が多かった観点をあえて挙げれば「5. 媒介語（日本語）」と「10. 復習・宿題」であり、これは、限られた時間で会話も文法も漢字も教えなければならぬ日本学以外の授業では、意識的に日本語を使う努力が必要であるということ、復習や宿題を積

極的・効果的に活用しなければ学習が成功しにくいということの反映ではないかと考えられる¹⁸。

2.3 学習者

ドイツの大学で日本語を学習する学習者が、どのような目標を持って日本語を学習し、実際にどのようなリソースを用いて学習しているのか、また、教室外でどのような日本語使用の可能性のあるのかを探ることを目的として、学生を対象とした調査を行った(学生に配布した調査票は付録参照)。時間的・予算的問題から、ミュンヘン大学の学生のみを対象とした調査となったため、1.4 節で述べたように、この結果をドイツの大学全体に一般化するのには難しい。以下は、あくまでもミュンヘン大学における事例として報告・考察していく。

まず、授業は、日本学向けコースと日本学以外向けコースの2つに分けられるが、回答率にはかなりのばらつきが見られ、特に日本学5学期は、今回の調査からだけでは母集団の様子を把握するのは困難である(表7)ため、以下では、日本学5学期学生2名の回答は、全体の集計ではカウントするが、コースの比較(2.3.1 節)に際しては無視することにする。男女別に見た場合、女性対男性の比率は6対4であり、現実の学習者の状況をほぼ正確に反映しているように思われる(表8)。

表7 授業別回答者数と回答率

コース	学期*	回答数	登録者数	回答率
日本学	1学期	41	68	60.3%
	3学期	21	59	35.6%
	5学期	2	40	5.0%
日本学合計		64	167	38.3%
日本学以外	1学期	26	47	55.3%
	3学期	15	17	88.2%
日本学以外合計		41	64	64.1%
全体合計		105	231	45.5%

* 学生の実際の在籍学期ではなく、登録している授業の学期数で集計した。

18 「5. 媒介語(日本語)」についてコメントした教師の割合が、日本学以外よりも日本学のほうが低いように見えるが、これは、日本学の担当者が、授業の中で日本語を使うことをさほど重視していないという意味ではない。調査ではもう一つ、「カリキュラム上学習させるべき項目の提示・練習のほか、授業を通して学生に特に伝えたいこと・理解してもらいたいこと、あるいは、特に心がけていることがありますか」という質問にも自由記述で回答を求めており、そこで「(できるだけ)日本語だけを使って授業をする」という回答した日本学授業担当者は6名(全体の50%)であった。

なお、アンケートでは「1. 学習のリソース」「2. 教室外での日本語使用」「3. 将来の目標」の順に質問したが、本稿では説明の都合上、3→1→2の順に結果を紹介する。

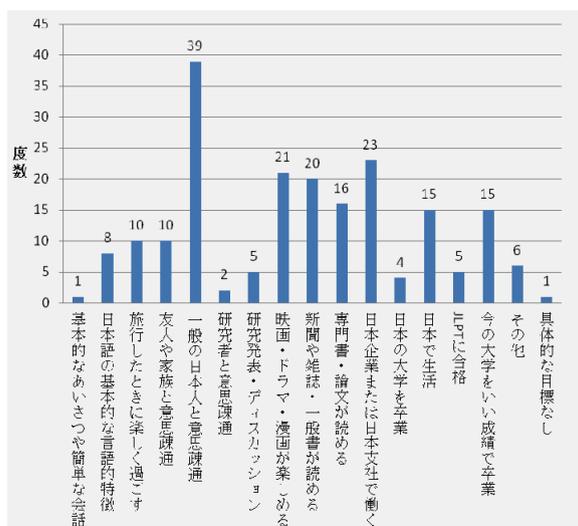
表8 回答者性別の概要

男女別	回答数	割合
男性	42	40.0%
女性	61	58.1%
無回答	2	1.9%
合計	105	100%

2.3.1 将来の目標

「日本語を使って将来どんなことがしたいですか」という質問に対して、該当する選択肢を最大3つまで選んでもらった¹⁹。全体の集計結果をまとめたものが図1である。これを見ると、「一般の日本人と意思疎通」が圧倒的で、次いで「日本企業または日本支社で働く」「映画・ドラマ・漫画が楽しめる」「新聞や雑誌・一般書が読める」がほぼ同程度に選ばれていることが分かる。

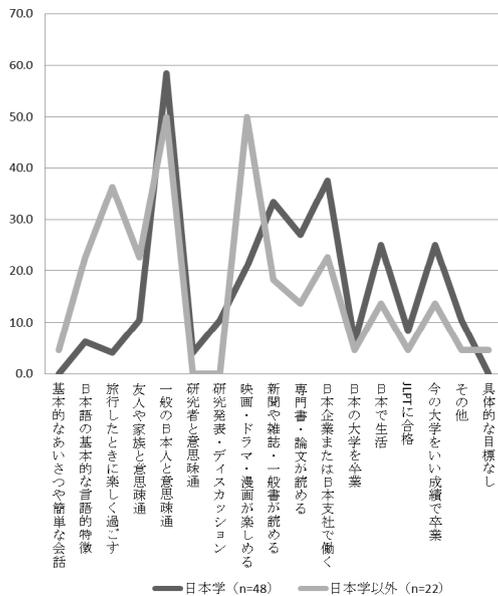
図1 日本語で将来したいこと(全体・回答者数)



19 4つ以上選んだ回答者が35名おり、その回答を除外した結果、70名(日本学48名、日本学以外22名)の回答が残った。

次に、コース別の違いを見るために、図 2 に、各コースで、選ばれた項目の度数がそのコースの回答者数全体に占める割合を折れ線グラフで示す。この図を見ると、「一般の日本人と意思疎通」は両コースに共通して多くの学生によって選ばれているが、第二・第三の選択肢の選び方には違いが見られる。すなわち、日本学の学生は「日本企業または日本支社で働く」「新聞や雑誌・一般書が読める」ことを選んだ学生が多いが、他方、日本学以外では「映画・ドラマ・漫画が楽しめる」と「一般の日本人と意思疎通」が大きな山をなし、第三の項目として「旅行したときに楽しく過ごす」が選ばれていることが分かる。

図 2 日本語で将来したいこと(コース別・%)



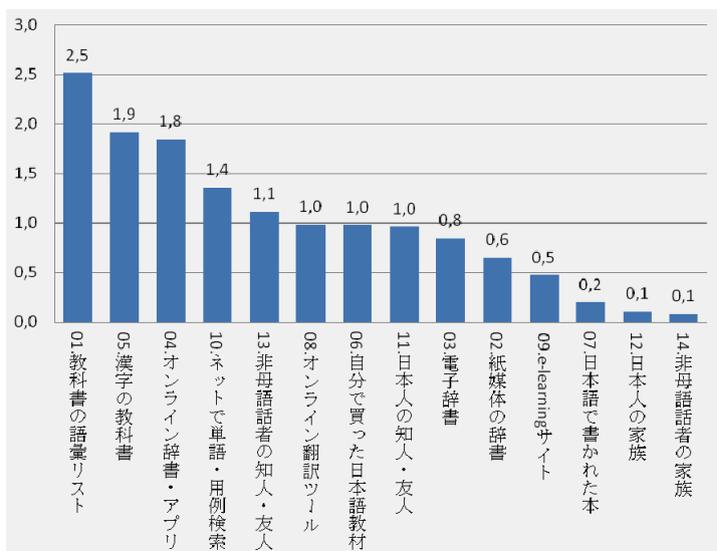
以上をまとめると、ミュンヘン大学で日本語を学ぶ学生の多くは、第一に、漠然と日本語が使えるようになりたい(「一般の日本人と意思疎通」と)と考えており、それに続いて、第二に、読書や映画鑑賞といったコンテンツ受容と、ビジネスあるいは旅行での積極的使用ができることを目標に掲げていることが分かる。後者は日本語での具体的なインターアクションだと言えることから、学生の日本語学習目標を概括すれば、ある程度インターアクション志向だと言うことができる。

2.3.2 学習リソース

それでは、学生は現実にはどの程度インターアクションに関わっているのか。まず、学習リソースについて見ていく。「日本語を勉強する際に、どのリソースをどの程度使っていますか」とい

う質問に対し、項目（リソースの種類）ごとに該当する頻度を0～3の数字で回答してもらった²⁰。図3はその集計結果を、全体の使用頻度平均が高いものから順に並べたものである²¹。

図3 学習リソース使用頻度の平均



* 横軸の番号はアンケートの選択肢番号に対応している

最も多かったリソースは「01. 教科書の語彙リスト」で、それに続いて「05. 漢字の教科書」「04. オンライン辞書・アプリ」が続く。このことから、多くの学生が、単語や漢字を調べるために、こうしたリソースを活用していることがうかがわれる²²。知人や友人といった人的リソースを利用することは少ないという意味で、学生の利用している日本語学習リソースは、インターアクション志向とは言えない。

20 評価基準は以下のように説明した。「0: まったく使わない (not at all) 1: あまり使わない (rarely) 2: 時々使う (sometimes) 3: よく使う (often)」

21 なお、コース別の違いについて統計的検定 (t 検定) を行った結果、いずれの選択肢においても有意な差が出なかったため、ここではコース別の比較は行わない。

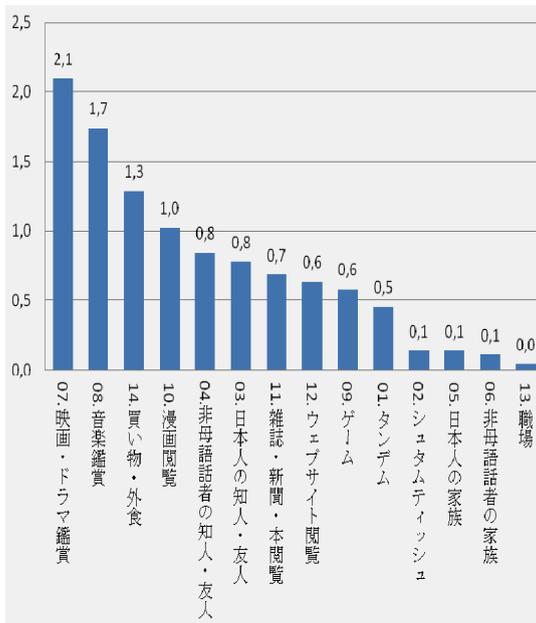
22 仁科・シュミットは、エアフルト大学の学生 15 名に対して、どんなメディアを日本語学習に使っているか、そしてメディアをどの分野の学習に利用しているかを聞いており、その結果でも、辞書・文字・語彙等を調べるためのメディアが最もよく使われていることが報告されている [仁科・シュミット 2013: 32-33]。

2.3.3 教室外での日本語使用

前節で見たとおり、学生の日本語学習リソースはインタラクティブとは言えないが、もしかするとインターアクションのために語彙や文字を調べているという可能性は考えられる。その場合、リソース自体のインターアクション志向は低くても、学習全体はインターアクション志向だと言うことができる。

そこで、「授業以外でどのぐらい日本語と接点がありますか」という質問に対し、項目ごとに該当する頻度を0～3の数字²³で回答してもらった。図4はその集計結果を、全体の使用頻度平均が高いものから順に並べたものである²⁴。

図4 日本語との接点(頻度の平均)



* 横軸の番号はアンケートの選択肢番号に対応している

** 「02.シュタムティッシュ」(Stammtisch)とは、定期的に行われる飲み会(この調査のコンテキストでは独日学生交流のための飲み会)のことである。

「07.映画・ドラマ鑑賞」「08.音楽鑑賞」は平均値が高く、多くの学生がこうした日本語コンテンツを楽しんでいる実態がう

23 評価基準は以下のように説明した。「0: まったくない(not at all) 1: あまりない(rarely) 2: 時々ある(sometimes) 3: よくある(often)」

24 なお、コース別の違いについて統計的検定(t検定)を行った結果、いずれの選択肢においても有意な差が出なかったため、ここでもコース別の比較は行わない。

かがえる。次に平均値が高いのが「14. 買い物・外食」である。これは確かにインターアクションではあるが、単発的でルーチン化された単純なものとも言える。

「10. 漫画閲覧」は予想したほど値が高くなかった。おそらく学習段階から見て、日本語で漫画を読むのがまだ難しいからではないかと考えられる。「01. タンデム」の値が低いのも印象的だが、これも同様に学習段階がタンデムをするほど進んでいないことによるのかもしれない。

「04. 非母語日本語話者の知人・友人」「03. 日本人の知人・友人」はどちらもばらつきが大きい(いずれも標準偏差が1.0)ことから、ごく一部の学生だけが積極的にクラスメイトや日本人の知り合いと日本語で話すようにしていることがうかがわれるが、全体的には人と関わる活動の頻度は低いと言わざるを得ない。

以上をまとめると、ミュンヘン大学の学生の教室外の日本語使用は、買い物・外食のようなルーチン化された単純なインターアクションを除けば、映画・音楽等のコンテンツ受容が中心で、インターアクション志向とは言えないということになる。

2.3.4 学習者の調査結果のまとめ

学習者を対象とした調査の結果をまとめると、ミュンヘン大学で日本語を学ぶ学生達は、ある程度インターアクション志向の学習目標を持ってはいるが、実際にはインターアクションを用いた学習、あるいは、インターアクションのための学習はほとんどしておらず、教室外での日本語インターアクションも非常に限られているということが言える。

3 まとめ

本稿では、ドイツの大学で日本語を教える JaH 会員、所属機関、および、ミュンヘン大学で日本語を学ぶ学生を対象として行ったアンケート調査の結果のうち、インターアクションに関わる側面を報告し、若干の考察を加えた。

明らかになったことは、まず、量的に見て、日本学のコース・授業ともにインターアクション志向が強いものが多いのに対し、日本学以外ではインターアクション志向のものが少ないということである。日本学と日本学以外のコース・授業が異なる条件・制約の元に置かれ、成立・実現の仕方にも違いが多く見られることは、ドイツの大学の日本語教育関係者の間では周知の事実であり、この結果はそれを追認したと言える。

回答の内容をコース別に整理した結果からも両者の違いは明瞭に見てとれた。すなわち、日本学コースにおいては、留学・タンデム・ビジターセッション・演劇等の大がかりなインターアクションを組み込んだカリキュラムが見られ、授業の中でも、

さまざまな工夫をして学習者をインターアクションに巻き込んだり、視点をインターアクションに向けさせたりしようとしている教師が多いことがわかった。一方で、日本学以外のコースのカリキュラムに組み込まれたインターアクションはグループワーク、プレゼンテーション、新年会、日本人留学生との交流促進等であり、授業においてインターアクションを志向している教師の数も比較的少ないという結果であった。それでも、日本学以外のコースの教師が、限られた日本人との交流の機会を積極的に活用し、授業内ではできるだけ日本語を使うようにするなど、可能な限り学習者に日本・日本語との接点を多く持たせようとしていることも同時にうかがうことができた。

ミュンヘン大学の学生に対する調査の結果は、インターアクションを日本語学習の目標としながらも、学習環境はインターアクション志向ではないということであった。ミュンヘンという比較的大きな都市にしながら現実のインターアクションとは縁遠いというのは意外に思える。また、この結果がミュンヘン大学の学生に限った傾向なのか、また、世代的なものなのか等は今回の調査では明らかではない。今後の課題としたい。

【参考文献】

- 飯島昭治 2011. 「ドイツの大学における日本語教育 — 授業経験からの一考察」 *Japanisch als Fremdsprache*, Vol. 2, 45-59.
- ウンケル, モニカ 2006. 「ドイツの大学における日本語教育の現状と問題点」 法政大学国際日本学研究所・ボン大学近現代日本研究センター(編) 『ドイツ語圏における日本研究の現状』 法政大学日本学研究所, 19-27.
- 奥村三菜子 2010. 「CEFR 実践と日本語学習ビリーフおよびストラテジーの変化 — BALLI と SILL の調査結果から」 『日本語教育連絡会議論文集』 22.
- 国際交流基金 2013a. 『海外の日本語教育の現状 — 2012 年度日本語教育機関調査より』 くろしお出版.
- 国際交流基金 2013b. 『2012 年度 日本語教育機関調査 結果概要抜粋』 www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/survey12.html (2014年9月25日アクセス).
- 国際交流基金 2014. 「日本語教育国・地域別情報」 www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/index.html (2014年9月25日アクセス).
- 杉原早紀 2011. 「実践報告: 日本人学校訪問プロジェクト」 *Japanisch als Fremdsprache*, Vol.2, 17-25.
- 仁科陽江、ウルリケ・シュミット 2013. 「ヤヒムメからヤヒムードルへ」 *Japanisch als Fremdsprache*, Vol. 3, 24-41.

ネウストプニー, J.V. 1995. 『新しい日本語教育のために』 大修館書店.

濱田朱美、小山洋子 2011. 「テュービンゲン大学の京都留学制度とその支援プログラム」 *Japanisch als Fremdsprache*, Vol. 2, 27-44.

【資料】 学生調査の調査票 (フェイスシートを除く)

Question 1: How often do you use the following resources when you study Japanese?

Choose a number from 0-3 which corresponds best to your situation and fill in each bracket.

3: often 2: sometimes 1: rarely 0: not at all
--

1. Vocabulary list(s) in / for the textbook []
2. Dictionary in book format []
3. Electronic dictionary []
4. Dictionary on the web or dictionary app []
5. Kanji textbook []
6. Learning material that you bought yourself []
If 1-3, tell us the title(s) of the book(s): _____
7. Other book(s) written in Japanese []
If 1-3, tell us the title(s) of the book(s): _____
8. Translation tool on the web []
9. Website(s) for learners of Japanese []
If 1-3, tell us the name(s) of the website(s): _____
10. Searching words or examples on the web []
11. Asking questions to Japanese acquaintance(s) or friend(s) []
12. Asking questions to Japanese family []
13. Asking questions to acquaintance(s) or friend(s), who is / are not native speaker(s) of Japanese []
14. Asking questions to family, who is / are not native speaker(s) of Japanese []

Question 2: How often do you have contact with Japanese language outside classroom?

Choose a number from 0-3 which corresponds best to your situation and fill in each bracket.

3: often 2: sometimes 1: rarely 0: not at all

1. Tandem []
2. Stammtisch []
3. Communication with Japanese acquaintance(s) / friend(s) in other situation []
If 1-3, tell us about the situation:_____
4. Communication with acquaintance(s) / friend(s), who is / are not native speaker(s) of Japanese []
If 1-3, tell us about the situation:_____
5. Communication with Japanese family member(s) []
6. Communication with family member(s), who is / are not native speaker(s) of Japanese []
7. Watching Japanese film / drama / anime []
If 1-3, tell us if it's with subtitles: [always with subtitles / sometimes / without subtitles]
8. Listening to music sung in Japanese []
9. Playing game in Japanese []
10. Reading / browsing Japanese manga []
11. Reading / browsing Japanese newspaper, magazine or book []
12. Browsing website in Japanese []
If 1-3, tell us the name(s) of the website(s):_____
13. At the working place []
If 1-3, choose and check the situation(s) from below: <Multiple answers possible>
 service for Japanese speaking customers (e. g. café, restaurant etc.)
 communication with Japanese speaking colleague(s)
 communication with Japanese speaking client(s) (e. g. business contact)
 other(s):_____
14. Shopping or eating out at Japanese shops or restaurants []
15. Other(s):_____

Question 3: What do you want to do in Japanese in the future?

Choose and check up to 3 activities which you think are most important for you.

I want to ...

- be able to exchange basic greetings and to hold a brief conversation
- understand essential linguistic characters of Japanese language
- have good time when I have a trip to Japan
- communicate with Japanese friend(s) / family member(s)
- communicate with common people in Japan
- communicate with Japanese researchers / professors
- give presentation / lecture and to hold discussion
- enjoy Japanese films / dramas / manga
- read Japanese newspapers / magazines / books of general interest
- read academic / professional papers / books
- work at Japanese company or a company's branch office in Japan
- study at and graduate from Japanese university
- live in Japan
- pass in the JLPT (which level?:____)
- get good marks in Japanese exams at the university and graduate with good grade
- Other(s):_____

- I don't have specific goals in my mind.

Thank you very much for your cooperation!